

第二次世界大戦における「神風特別攻撃隊」に対する
武士道の価値観の影響

アスリ

0242047

マラナタキリスト教大学文学部

日本文学部

バンドン 2006

序論

第二次世界大戦において、日本は神風という特殊部隊を形成した。この神風という言葉は、1281年、日本が蒙古と戦争した際危機から日本を救った大きな台風から由来するのである。実際、日本人は、この部隊を神風特別攻撃隊と呼んでいるが、外国人が神風という二つの文字を誤ってカミカゼとよんでしまったのである。それが、現在に至るまでカミカゼ部隊と呼ばれるようになったのである。この特殊部隊の隊員はみんな自分の国を守るため、自分の操縦している飛行機を敵の戦艦にぶつけて自爆する勇気のある者であった。日本軍にとって、このような隊員を動員することは簡単なことであった。なぜならば、当時、武士道という武士が規範とするものが日本人の若者の頭にしっかりとやきついているからである。

神風特別攻撃隊は、第二次世界大戦において物議を醸した現象であった。本論文では、この部隊を形成した背景に何があり、またこの部隊と武士道の価値観とどのような関係で結びついてい

るか研究分析してみる。研究分析にあたっては、歴史文化的アプローチを使う。

本論

武士道は大和時代の権力者が作り出した神話から生まれたものである。その後、これは、武士が遵守する規範となり時代が進むにつれて、日本の社会慣習となるのである。武士道は死に狂いであるという。従って、武士は自分の主君を守るためには、自分の命を犠牲にしてでも生きるべきである。葉隠れという本に、「武士道というは死ぬことをみつけたり」とかいてある。解決困難な問題にぶつかったとき、それに負けるより死をえらぶ方が良いという、意味である。このような価値観が、自分の国、天皇をまもるために、死を覚悟して自分の命を犠牲にする神風の若い操縦士たちによく見うけられる。主君に対する武士の忠誠心が天皇に対する忠誠心の根源となるのである。この忠誠心が第二次世界大戦に至るまで受け継がれるので一般人が軍隊、神風部隊に入隊する動機となるのである。この天皇への忠誠心の表示はサイパン

島における集団自殺にでも証拠つけられたのである。神風部隊が形成される経緯としては、第二次世界大戦において日本軍が困難な状況に陥ったためである。当時、燃料。優秀な操縦士も不足していたのである。そのため、その状況から切り抜けるため、神風部隊を形成したのである。神風の攻撃が敵とわたり合うことのできる唯一のこの部隊に入隊した隊員はみんながそのような方法で死ぬことを望むわけではない。止むを得ず、入隊した者もいたのである。

神風攻撃隊員は自分の愛している人に最後の記念として手紙を残すのである。その手紙の内容のほとんどは、自分が死んだら自分の霊は請国神社に宿し、そしていつか天皇が自分たちのために墓参りをしてくれると書いてある。

結論

上記で述べたことから、次の結論を引き出すことができる。

— 神風特別攻撃隊は、日本軍が困難な状況に立たされたために形成された。

— 天皇への忠誠心が神風特別攻撃隊の操縦士になることに若者を促進する。

— 負けるより死ぬことを選ぶという武士道の教えが若者を動機付けていた。